

# 新「精進」学び続ける

自己研修通信

発行 青坂信司

第009号 平成29年11月16日(木)

～私たち自身による「学びの場」を創り出そう！～

◆「未来の教育」で大切なことは何か。それは教師力向上である。教師の力こそ、未来の教育を切り開いていくのである。教師という言葉でなくてもよい。教える側の力である。

これからは「学校力だ」「チーム学校だ」などと言ったりするが、それは私からすると本筋ではない。やはり一人一人の教師・教える側の力こそ、教育にとって大切なのである。

◆来春、私は校長職を去る。校長は、自分のためにあるのではない。学校全体の子ども・職員のためにいる。そのために制限がかかる。

私は、それが当然だと考えてきた。休みの日も、特に子供に何かあった時のために、校区をできるだけ離れず、緊急の連絡があれば対応できるようにしてきた。

遠くにいて、アルコールを飲んでいて、自分の車で帰れない時は、タクシーを飛ばしてでも帰る覚悟はあった。日常や軽微な案件の時には、教頭以下部下職員にほとんどを任せているが、重大案件が生じれば「校長の出番」だと思ってきた。

そうした制限とも、もう少しでおさらばである。ある程度、自由に動けるようになるはずである。一番私がしたかったことをしていきたい。

それが教師力向上。子どもにとってより価値ある教育ができるようになること。価値ある教育ができる教師を育てることだ。ただし、育てると言ったらどこか傲慢だ。育つ場を提供するということだ。

◆もう20年も前になるだろうか。根室管内に「学級経営ネット」というのを立ち上げたことがあった。これは管内教育関係団体として、半公的に認知されたものであった。

しかしながら、あっという間につぶれてしまった。どうしてつぶれたのかは今となっては記憶に残ってはいない。ともかく、この「学級ネット」を立ち上げた時に何かの冊子にのせるのか、書いた文章が以下のものである。

ささやかなる「挑戦の場」

青坂 信司

★稲垣佳代子、波多野誼余夫著の『知的好奇心』『無気力の心理学』『人はいかに学ぶか』（いずれも中公新書）の3部作は、教師にとって子どもの心を理解する上では必読の書である。

著者は『人はいかに学ぶか』の中で次のようにいう。

学び手としての能動性や有能さを引き出すには、教師が肯定的な学び手のイメージをもち、彼らを信頼することがまず必要だが、それだけで十分というわけではない。

どんな考え方をとる場合もそうだが、よい実践のためには、教え手の創造力が決定的に重要である。

子どもの創造力や有能さを発揮させるためには、教師自身にもまた教えるための創意工夫や創造力が要求されるのである。

ところが一人で学んでいたのでは、限界がある。独善的で閉鎖的な実践に陥りやすくなる。そのことは、教師にとっても子どもにとっても不幸なことである。

★根室管内には、毎年、何十名もの教師が新しくやってくる。そして、何年かすると大方の教師がこの地を去っていく。これがこの根室の特徴である。

私は、この事実について批判的なことを述べるつもりはない。

私がここで言いたいことは、その新しくやってくる教師として白紙の状態の人たちに対して、その人にとってためになる「学びの場」を提供できているのか、ということなのである。

どの人も、学びたがっている。どの人も、子どもにとって価値ある教師になりたいと思っている。どの人も、すぐれた教師になる可能性を秘めている。

「民教」だとか「法則化」だとか「仮説」だとか「組合」だとか「管理職」だとか「行政」だとか、人をそうした色眼鏡で見ると閉鎖的セクト的になるのではなく、広範な教育文化をこの根室に作り上げることこそ重要なことである。

そのことが、真に根室の教師の力量を高め、根室に根づいた教育文化を作り上げていくのである。「学級経営ネット」 そのための「学びの場」である。

★一人ひとりの教師には、さまざまな過去があり、さまざまな生活を背負っている。私たちが教室で「子どもたちは一人ひとり違っていい」と言っているのと同じように、一人ひとりの教師は違っていいのである。

私たちの「学びの場」がすべきことは、その教師一人ひとりの違いを見つめることでなく、未来の夢を共有し、具体的に活動していくことなのである。

私は、もっと多くの人と子どもと教育について語り合いたい。私は、もっと多くの人から学びたい。そうすることが、自分自身の「自己実現」につながると思うからである。

「学級経営ネット」

それは、未来の夢を共有し、根室に新しい教育文化を作りたいと願っている教師たちのささやかなる挑戦の場なのである。

◆約20年も前に書いたことだが、今の私の考えと通じるものがある。いやそれ以上に同じだと思っ  
ていいのかもしれない。私は次のように書いている。

私たちの「学びの場」がすべきことは、その教師一人ひとりの違いを見つめることでなく、未来の夢を共有し、具体的に活動していくことなのである。

私は、もっと多くの人と子どもと教育について語り合いたい。私は、もっと多くの人から学びたい。そうすることが、自分自身の「自己実現」につながると思うからである。

◆退職後、ここを一番していきたいことなのだ。このためのステージを「サークル」という形なのか「道東教育技術研究所」なのか「エトセトラ」なのか、それとも全く違う形なのか。そこをもう少し、仲間の考えや意見を聞いて考えていきたい。